二

吉原会所の帰り道、磐音は両国広小路の一角にある今津屋に思い気持ちを抱いたまま立ち寄った。

「どうなされた、浮かぬ顔をしておいでじゃが」

老分の由蔵が帳場格子の奥から訊いてきた。

相変わらず今津屋の店先は客で溢れていた。由蔵の前には二つ茶碗が置かれているところを見ると、客との応対を済ませたばかりのようだ。

「ちと老分どのに相談事です。いえ、それがしの一件ではありませぬ。旧藩のことにございます」

「豊後関前藩六万石でしたな」

由蔵は、どうぞお上がりなさい、と言うと自らも立ち上がった。

磐音を連れていったさきは台所の板の間の火鉢のそばだ。すでに女子衆が夕餉の仕度にかかっていた。

「老分様、坂崎様、お茶をお持ちしますかね」

と台所を仕切るおつねが言いかけた。

「この度、父が国家老に就きましてございます」

「それはめでたい」

「借財だらけの小藩の家老など苦労ばかりでおめでたくもございませぬ。そのことを、今津屋どのとお付き合いさせていただくようになって身に染めて感じております」

「大名家の台所はどこも火の車ですからな」

「父の肩には実高五年分の借財の返済の責任が負わされているのです」

「坂崎様が国許に戻られ、藩の財政改革に着手なされようとしたのが二年前ですか」

「有為な人材を失った上に二年分の無駄を費やしました。その間に借財も増えました。今、父は殿と相談の上、再び藩再建策を国許、江戸の藩士方に献策したところにございます」

「坂崎様、今津屋に再建の手助けをと申されるのですか」

磐音は頷くと、

「もし今津屋どのがご承知なれば、藩の担当の者に再建の具体策の説明に来なせます」

「採算はおありですか」

「われらが二年前に立案した策を父は検討させております。簡単に申せば、領内の物産を藩が一手に集荷して、値の高い上方か江戸に雇船で運び込み、販売する策にございます」

「領内の物産はなんでございましたかな」

「海岸線が長い藩にございますれば、海産物が主にございます。干し海鼠、干鮑、干鰯、するめ、昆布、鰹節といったものから、上質な関前半紙がございます。さらには椎茸、溜り、蝋燭といったものでしょうか」

「なかなかの物産にございますな」

「前の国家老の時代には、城下の御用商人とばらばらに商いをして、値の低い取引を続けてきたのでございます」

「つまり、利は時分の懐にですか。よくある話にございます」

そう答えた由蔵は、

「私の一存ではなんとも申せませぬが、旦那様と相談の上、藩の方々とお会いするかどうかお返事させて頂きます」

磐音は頭を下げた。が、もう一つ緊急の要件があった。

「老分どの、父の頼みはこれだけではないのでございます」

「ほう、ほかにございますか」

「言いがたいことながら、この参勤下番の入費二千五百両の手当てが国許にて都合立たずというのです」

「それは困りましたな」

由蔵にはかような話は毎日のことだ。驚いた様子もない。

「担保はございますか」

「藩物産所を江戸に立ち上げ次第、返済するというのではいかがでございますか」

「坂崎様ゆえ正直に申し上げます。他藩の申し出なれば一顧だにせずお断わり致すところでございましょうな」

磐音は力なく頷いた。

まだ立案段階の再建策の儲けをと言われても、並の商人なら二の足を踏むのは目に見えていた。

「坂崎様、ちとお伺いしてようございますか」

「なんなりと」

「過日、旦那様は、奈緒様の身請けの金子を都合する気でおられました。それは偏に坂崎磐音という人つを信頼してのことにございます。だが、そなた様は、お断りなされた」

磐音は小さく首肯した。

「なぜお断りなされたな」

「奈緒どののことは、私事にございます。また金子で解決がつくことでもございますまい」

「旧藩のためなら、この由蔵に頭を下げられる」

「老分どの、関前はんの参勤下番入費が調達できるかどうかには、藩主福坂実高様以下、家臣、家族、領民ら大勢の暮らしがかかっております。これは一藩の、一藩主の体面のみではない、関前藩の存亡がかかっているのです。生きるかどうかの暮らしがかかっているのです」

由蔵は頷く。

「それがしの父、正睦の清廉と篤実、さらには経営の手腕を信じております。父が、必ず成し遂げると信じております」

「坂崎様、お戻りになり、お父上の手伝いをなさることが藩政改革を推進する早道ではありませぬか」

「老分どの、それがしが関前藩に戻り、改めて今津屋どのの見世に立ったとき、かようにも親身に話を聞いていただけましょうや」

「はてそれは……」

「豊後関前藩六万石の家臣としての対応にございましょう」

「まあ、そうかもしれませぬな」

「それがし、望んで市井に身を置くことに決めました。そのほうが関マセ藩改革の、父の手助けができると考えたからにございます」

「よう分かりましてございます。旦那様と相談の上、お返事申します」

と答えた由蔵は、

「坂崎様、藩の方に申してくだされ。関前藩の物産事業の詳細案を書き付けにてお見せくださること、今ひとつは参勤下番の入費二千五百両の担保を明示されること、この二つについてお答えいただきたいとな」

「承知致しました」

磐音は深々と頭を下げた。

正月七日、城中から町家までこの日は七草粥を食べる習わしがあり、これを食すると万病を除き、邪気を払うとされていた。

若菜節、七草節とも別称される五節句の一つであった。そんな快晴の空の下。大名は熨斗目、長裃で登場する日でもあった。

奈緒の吉原乗り込みが延期されたこの日、磐音の姿は神田明神の境内にあった。

宮戸川の鰻割きのしごとを終え、六間湯に浸かって鰻の生臭を落とした後に神田明神まで出向いてきたのだ。

昨日、六間堀の金べえ長屋に戻った磐音は、中居半蔵に宛てた手紙を認め、鰻捕りの幸吉に頼んで、駿河台の豊後関前藩上屋敷まで届けてもらったのだ。

神田明神は江戸幕府誕生以来、神田橋御門近くにあったが、江戸市中の拡大とともに駿河台の鈴木町へ、さらには元和二年に湯島台地に移ってきたのである。

磐音が北側に広がる江戸の家並みを見下ろしていると、

「待たせたな」

という中居半蔵の声がした。

磐音が振り向くと、中居が額に汗を光らせて立っていた。

「昨日、俄に新任の江戸家老が着任なされてな、今日は藩邸内の顔合わせで朝から走り回っておった」

「分家の利高様にござまいすそうな」

「正睦様の手紙にあったか」

頷く磐音に、

「鷹揚なご気性と思われる反面、才気煥発の面も見せられる。だがな、江戸の事情に疎いのだ。ちと苦労するかもしれぬな」

「おいくつにございますか」

「三十七になられたばかりだ。ともかく、そなたのお父上にとくと藩政の厳しい事情を聞かされたとみえて、改革に張り切っておられる」

そう答えた中居は、

「立ち話というわけにもいくまい。どこぞの茶店にでも入るか」

と北側の門前下への石段を下り、途中にあった茶店に磐音を伴った。

蕾がすでに紅く色を滲ませている梅の木の下の縁台に座った中居は、

「呼び出したということは、今津屋と話したということか」

と訊いてきた。

頷いた磐音は、老分の由蔵との話の模様を告げた。

「なにっ、物産事業の詳細か。坂崎、これは関前藩の中でも少数の者しか知らされぬ、命運をかけた事業だぞ」

「中居様、だからこそ、今津屋のような資金と人脈を潤沢に持つ商人の助けが要るのです。豊後関前藩だけでできる話ではありませぬ」

「それは確かだな、関前藩の内情がすべて今津屋に筒抜けではないか」

「中居様、六万両に及ぶ借財を返済するためには、関前藩の体面になどこだわってはおられませぬ。まずは裸になることです」

「とは申せ……」

江戸の事情に詳しく、さらには藩政の現実を承知している中居半蔵ですら、この反応だ。

国表から江戸に出てきた分家の福坂利が理解してくれるかどうか、磐音は不安に思った。

「中居様、実高様の関前帰国は差し迫っております。今津屋では父上が提案した物産事業を立ち上げた後に返済するという策では、請け負いかねぬというのです」

「それはあくまで老分の考えだな」

「中居様、今津屋の老分ほどの言葉なれば、主の考えとまず同じと思って差し支えございませぬ」

中居半蔵はしばし、うーんと声を出して唸りながら考え込んだ。

「厳しいのう。まず、そのようなれば、他の両替商を当たれと主張なさる方々がおられような」

「おそらく他の両替商に新たな借財を申し込んでも同じにございましょう。あるいはもっとひどい扱いを受けましょう。豊後関前藩は、未だ藩がいかなる状況にあるか承知しておられぬようですね」

磐音は、元日から雄藩の江戸家老や留守居役が一両替商の店を訪れて挨拶をなす現実を語った。

「相分かった。急ぎ藩邸に戻り、新任の利高様らにご相談申し上げ、早々に結論を出す」

「中居様、念のために申し上げます。時間の猶予がないのは関前藩にございます。今津屋には関前藩の御用をなす理由はなにひとつないのです」

「坂崎、そなた……」

「中居様、武は商にすがるしか暮らしを立てられぬ。これが江戸の現実なのです。それがし、長屋暮らしをしてつくづく思い知らされてございます」

中居半蔵が磐音の顔を正視し、

「さほどまでに苦労しておるか」

と呟くように言った。

磐音が夕餉の支度をと考えながら両国橋を渡ると、東広小路で棒手振りの魚屋に会った。女たちが磐台を囲み、鰯を買っていた。中ぶりのかたちのよい鰯だ。

「残っておるか」

「旦那、十五、六匹、残ってるぜ。総ざらえしてくれると安くするぜ」

「こちらは独り身だ。鰯ばかりあってもな」

と答えながら、昨日、使いを頼んだ幸吉一家のことを思い出した。

「よかろう、いくらだな」

「五十といいたいが、四十文でどうだね」

「もらおう」

「笊を持ってきな」

魚屋が言った。

「笊と言われてもな」

と考えた磐音は、ちょっとまってくれと矢場の「金的銀的」に走っていって、女将に笊を借りてきた。

鰯を盛った笊を抱えて唐傘長屋を尋ねると、ちょうど夕餉の支度時分で、井戸端に女たちや子供たちが集まっていた。

「おや、また使いかい」

溝板の上に立っていた幸吉が磐音の姿を見て、訊いてきた。

「東広小路で鰯を購った。それがしは二、三匹もあればよい」

「いつかも鰯を持ってきたな。たまには鯛とか鰹とかよ、上魚をもってきてくんな」

幸吉が悪態をつきながらも、

「母ちゃん、おかずが飛び込んできたぜ」

と母親のおしげに嬉しげに言った。

「浪人さん、いつもすまないね」

と立ち上がったおしげの目が笊の鰯を見て、

「おや、なかなかの鰯だよ。煮るか焼くか」

と言い、

「浪人さんはどうする気だね」

と訊いてきた。

「まだ考えておらぬ」

「なら、うちでやいてさ、幸吉に旦那の分を届けさせるよ」

「それは助かる。飯だけ炊いて待っておればよかな」

磐音は笊ごとおしげに渡した。

「東広小路の矢場、金的銀的で借り受けた」

「ならさ、それも一緒に矢場に返させとくよ」

深川六間堀の金兵衛長屋に磐音が戻ったのは夕暮れ前のことだ。

釜に米を三合ほど入れて、井戸端に行き、米を研いだ。さらに竈に火を熾して釜をかけた。

『初めちょろちょろ中ぱっぱ、赤子泣くとも蓋とるな』

そんなことを胸の中で言い聞かせ、徳利を摑むと茶碗に注いだ。

飯の炊き上がる匂いを肴に茶碗酒をちびちびと飲む。

「浪人さん、鰯が焼けたぜ」

幸吉の声がして、縁のかけた皿に焼き上がったばかりの鰯が三匹と、油揚げとひじきと大根の煮付けが届けられた。

夕暮れになって寒さが厳しくなったようだ。幸吉の吐く息が白い。

「これは馳走だ」

「おれはよ、金的銀的に笊を返してくらあ」

幸吉はすぐに表に飛び出していった。

磐音は飯が炊き上がるまで、届けられた鰯と煮付けを肴に酒を飲んだ。

磐音が満足した腹を抱えて、さて休もうかと考えたとき、長屋の木戸口を入ってきた人物があった。溝板を踏む足音はなにかを探しているようだ。

磐音はちらりと刀に目をやり、待った。すると足音は、磐音の戸口の前に止まり、

「坂崎様のお住まいはこちらにございますか」

と抑えた声が訊いた。

「戸には心張り棒は支っておらぬ。開けられよ」

「ごめんなすって」

声がして腰高障子が開けられた。すると見知らぬ顔の細身の若い男が立っていた。長半纏の肩にうっすらと雪が降り積もっていた。

「吉原会所の仁吉にございます。お頭の言付けを申し上げます。尾張の連中の隠れ家が判明しました。坂崎様のお力を借りたく参上しました」

「仕度をいたすゆえ中に入って待っていてくれ」

磐音は寝巻き代わりの浴衣から黒地の合わせに着替え、道中袴を穿くと防寒を考え、羽織を着た。

備前包平二尺七寸と無銘の脇差一尺七寸三分を腰に差し、ひと揺すりして落ち着けた。

鰹節屋から貰ってきた箱に立ってた友のいはいに視線をやると、

（明日は奈緒の晴れの門出だ、尾張の連中に邪魔などされたくない。奈緒の身を守ってくれ）

と呟いた。

「待たせたな」

と仁吉の待つ狭い土間に下りた。